

## 肉体の復活



部 1970/10

Laying the Foundation  
著者 デレク・プリンス

1テサロニケ 5:23—24 を宣言しましょう。自分のものとして宣言するために、「あなたがた」という部分を「私たち」に言い換えましょう。今日の学びは主の再臨についてなので、それに備えるための特別なみことばです。

「平和の神ご自身が、私たちを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、私たちの霊、たましい、からだが完全に守られますように。私たちを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。」

土台の教えも残り2つとなりました。この学びでは、死者の復活について、最後の学びでは、永遠の裁きについて話します。

「今、平和の神ご自身が私たちを完全に聖別し、私たちの全ての霊、魂、体が、私たちの主

イエス・キリストの来臨の際に非の打ち所なく保たれますように。私たちを招いてくださる方は忠実であり、必ずそれを成し遂げてくださいます。|

アーメン。

さて、私たちは偉大な基礎教義の最後の2つ、死者の復活と永遠の裁きにきました。このセッションでは死者の復活について扱い、次のセッションでは永遠の裁きについて扱います。

復活という言葉の意味を理解する必要があります。ギリシャ語では、「～から立ち上がる」です。つまり、復活とは死からの立ち上がり、墓からの立ち上がりです。今日宣言したみことばで、人は、霊とたましいとからだの三つから成っていることがわかります。からだは死に、そのからだが、よみがえらされるということを理解することは重要です。霊とたましいは死ぬことがないので、復活する必要はありません。ですから、からの復活について語っているのです。これは非常に重要なことです。

では、人が死んだあとに何が起こるのかを聖書の中から少し見ていきましょう。国籍や文化に関係なく、誰もが死後に何が起こるのかを知りたいと思っています。

それは聖書にかなり明確に書かれているので、その概要と復活への影響を見ていきたいと思います。ルカ16:22—31で、イエスは死後に何が起こるのかを示しています。これは決して「た

とえ話」とは呼ばれていないことを言うておきます。これに関して「たとえ」という言葉が用いられていないからです。ルカ16:19からです。

「ある金持ちがいた。いつも紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮らしていた。ところが、その門前にラザロという全身おできの貧しい人が寝ていて、金持ちの食卓から落ちる物で腹を満たしたいと思っていた。犬もやって来ては、彼のおできをなめていた。さて、この貧しい人は死んで、御使いたちによってアブラハムのふところに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』アブラハムは言った。『子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。そればかりでなく、私たちとおまえたちの間には、大きな淵があります。ここからそちらへ渡ろうとしても、渡れないし、そこからこちらへ越えて来ることもできないのです。』彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。

ら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。

それは、経験によって真実であると証明されました。イエスが死からよみがえられた時でさえも、モーセと預言者たちを信じなかった人々には、何が起こったのかを認識していませんでした。これは非常に厳粛な考え方です。私たちは時にすばらしい超自然的な現れを期待し、それが起こったら納得できるというのです。しかし神は、「あなたが私のことばを持っているなら、それで十分だ。それを信じて従うなら、みことばがあなたを導く」と言われます。

さて、この金持ちとラザロの話で示されている5つの特徴を見ていきましょう。

第一に、死んだ後も人格は続きます。金持ちの男はその男のままで、ラザロもラザロのままでした。二人とも自分の人格を失ってはいません。死後は全てが消え去り、何も残らないと教える人もいますが、それは聖書的ではありません。私たちは死後も、生きていた時と同じ人格が続くのです。

第二に、人としての認識があることです。金持ちはラザロのことも、アブラハムのことも認識できました。そしてラザロは金持ちの男を認識できました。

第三に、地上での生活の記憶があることです。金持ちとラザロは、死ぬ前のそれぞれの生活の状況を思い起こすことができました。

第四に、現在の状態の自覚があるということです。金持ちは苦しんでおり、その舌は炎で焼かれていましたが、ラザロはアブラハムのふところで慰められ、平安を得ていました。

第五に、義と不義の間に完全な隔たりがあったということです。それぞれに決められた場所があり、互いに行き来することはできませんでした。

その5つを復習しましょう。非常に重要なことであり、今日流布している多くの理論に反するものなのだからです。

一つ目、アイデンティティーは失われず、人格は継続する。

二つ目、人を見てその人が誰であるかを認識できる。

三つ目、地上での人生の記憶がある。

四つ目、死後の現状の自覚がある。

五つ目、義と不義の間に完全な隔たりがある。

さて、イエスが死んで復活する前に死んでしまった人々には、何が起こりましたか。その出来事が人類の歴史を二分したので、イエスの死と復活の前と後では、たましいの行き先は同じではありません。イエスの死と復活は、実に全宇宙に変化をもたらしたのです。それは宇宙の歴史で最も決定的な出来事であり、死んだ人に起こることに影響を与えました。



「人々は大声で叫びながら、耳をおおい、いっせいにステパノに殺到した。そして彼を町の外に追い出して、石で打ち殺した。証人たちは、自分たちの着物をサウロという青年の足もとに置いた。こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで、こう言った。『主イエスよ。私の霊をお受けください。』」

「そして、ひざまずいて、大声でこう叫んだ。  
『主よ。この罪を彼らに負わせなくてください。』  
こう言って、眠りについた。」

しかし、私が強調したいことは、イエスの血によってきよめられ、神のために忠実に生きる真の信者が死ぬとき、霊はイエスの元へ直接引き上げられるということです。パウロも、このことをピリピ1章で言及しています。彼はどちらを選べばよいのかわからないと言っています。地上で生き続けることか、それとも死んでイエスの元へ行くことか。ピリピ1:23です。

もう一つ起こったことがあります、私がお伝えできることもいくつかありますが、すべてについて詳しく語ることはできません。それは、アブラハムのふところにいた義人のたましいが解き放たれたことです。エペソ4:8を見てみましょう。ここでは詩篇

また、イエスのからだの復活は私たちの模範です。そのことにみなさんが興奮してくださることを願います。そうでなければ



ます。

「ところが、ある人はこう言うでしょう。『死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。』」

ほとんどの人がそう思ったことがあるでしょう。

「愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。」

そして、続けてその種のたとえを語っています。

「あなたが蒔く物は、後にできるからだけではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにかからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。」

さて、そこには継続と変化という2つの要素が組み合わさっています。リンゴの種を植えて、みかんを収穫することはできません。種の性質は、その種から生まれる命の性質を決定づけます。つまり、継続性がありますが、変化もあります。りんごの木は、土に植えた種とは全く違った形をしています。継続されるものがあり、あなたはあなたのままですが、劇的で超自然的な変化が起こります。あなたが蒔いたものが、生まれてくるものを決定づけますが、生まれてくるものは、蒔いたものとは全く違う姿です。ですから、私たちのからだは種として地中に埋葬され、同じからだで出てくるにもかかわらず、まったく違った姿です。それは非常に輝かしい姿であると思います。

種について考えるとき、私はいつも驚嘆します。その小さなものについて考えるとき、いつもスイカの種を思い浮かべます。その小さな黒い種を土に蒔くと、大きな丸いスイカが出てくることは、奇跡の連続です。種を蒔くたびに、私たちは奇跡を植えているのです。そしてその奇跡は、私たちの復活を思い起こさせるためのものです。

イエスはよみがえられた時、それが十字架につけられたその同じからだであることを強調することに注意を払いました。ルカ24章を見ましょう。イエスが最初に現れたとき、弟子たちはみな、ひどく恐れしました。何が起こったのか全くわかりませんでした。しかし、ルカ24:38-39で、イエスはよみがって現れた後に、弟子たちにこのように言っています。

「すると、イエスは言われた。『なぜ取り乱しているのですか。どうして心に疑いを起こすのですか。わたしの手やわたしの足を見なさい。まさしくわたしです。』」

彼らに見せたイエスの手とわき腹には、十字架につけられた証拠がありました。同じからだでありながら、変えられたことを明らかにしたかったのです。

そして、ヨハネ20章には、イエスの復活についてのさらなる記録があります。19節です。

「イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』」

「平安があなたがたにあるように」というのは、中東の伝統的なあいさつです。

「こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。」

イエスは何故そのようにしたのでしょうか。それが十字架につけられた同じからだであることを示すためです。トマスはその場にいなかったので、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言いました。そして、一週間後にイエスが再び現れ、トマスにこう言いました。27節です。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。」

つまり、トマスが手を差し入れることができるほどの傷が残っていたのです。これは非常に重要なことです。なぜなら、あなたが復活する時、あなたは新しいからだを持つのではなく、違った姿に見える、変えられた同じからだだからです。

パウロは、私たちの復活するからだの5つの具体的な変化について述べています。1コリント15:42-44、そして52、53節です。

「死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものによみがえらせ...」

朽ちるものとは何のことでしょう。腐敗です。腐敗するものはみな、朽ちるのです。

「卑しいもので蒔かれ、栄光あるものによみがえらせられ、弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらせられ、血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらせるのです。」

血肉のからだがあり、御霊のからだがあります。それは理解しにくいものです。残念なことに、その翻訳は分かりにくいのです。これは英語翻訳の問題点の一つで、どの翻訳も同じ問題が

生じています。ギリシャ語の単語は、psuchekos で、ギリシャ語でたましいという単語の psuche から直接派生しています。唯一、妥当な翻訳は「肉的」(人間的思考)です。肉のなからだが蒔かれ、御霊のからだでよみがえらされます。そのように、霊とたましいの区別があります。いくつかの言語、たとえばスウェーデン語やデンマーク語には、「肉的」を表す単語があります。他の言語にも、聖書が教えているものを正しく表現するための単語があればよいのですが。

たとえば、1コリント2:14でパウロはこう言っています。

**「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。」**

その翻訳はすべて、「生まれながらの人間」、「肉のままの人」などとなっています。それは、肉のな人と御霊の人の非常に重要な違いが曖昧になってしまっています。正確には、肉のなからだが蒔かれ、つまり葬られ、御霊のからだでよみがえるということです。

それをうまく説明することは、私にはできません。しかし、私は何について言っているのかは知っています。私たちの現在のからだでは、たましいが決断を下すということです。私がドアを歩いて行きたかったら、私のたましいはドアを通るように言い、私の足はそれに従います。ある意味、私たちの霊は私たちのたましいに依存しているのです。ダビデが自分のたましいに言ったことを思い出してください。「わがたましいよ、主をほめたたえよ。」ほら、そうするんだと。霊は主をほめたたえたいのですが、たましいは反応が鈍かったのです。どうやらそうだったようです。正しいことを行うためには、自分の霊が自分のたましいをかき立てるようにしなければなりません。私たちは主をほめたたえるべきだとわかっているのに、たましいは鈍いので、かき立てなければならないのです。このことに納得できないかもしれませんが、これが私にできる最善の説明です。

からだでよみがえる時、それは御霊のからだとなります。つまり、霊が直接からだを統制します。どのようにででしょうか。私にはわかりません。何年も前、デンマークで一人の床屋の男性に出会いました。彼はどちらかというと単純な人でしたが、ある日こう言いました。「夢を見たんだ。私はからだのようなものの中にいて、行きたいところをただ指し示すと、そこへ行けた。右へ行きたかったら右を指し、左へ行きたかったら左を指す。私が指し示すどこへでも、私のからだは行ったんだ。」それは御霊のからだであると、私は思います。からだがどのようなものになるかという小さな予見です。あなたがからだを動かすために、たましいを通して命令する必要はなく、あなたの霊が決断をします

このことを受け入れるかどうかはあなた次第ですが、これが、私が提供できる最善のものです。

では、1コリント15:52-53を読みましょう。こう書いてあります。

**「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。」**

朽ちるものは腐敗の支配下にあり、死ぬべきものは死の支配下にあります。この聖句の2つの文には、私たちのからだに起こる5つの具体的な変化があります。

朽ちるものは朽ちないものへとなり、腐敗の支配下にあるものは、もはや腐敗の支配下にありません。死から不死へとなり、死はもはや死の支配下にありません。葬られた者は恥から栄光へとなる。それはある意味、みじめというよりは、私たちが下る方法と言えます。私たちがよみがえる時、栄光のうちによみがえります。弱いもので蒔かれ、強いものによみがえらされます。そして、すでにお話ししたように、肉のなからだが蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされます。それら5つの変化を復習しましょう。

朽ちるものから朽ちないものへ。

死から不死へ。

恥(卑しいもの)から栄光へ。

弱いものから強いものへ。

肉のなものから霊に属するものへ。

さて、イエスの復活は、キリスト教の教えの最重要の要素です。それを脇に置いて、自分をクリスチャンと呼ぶことはできません。1コリント15:14でパウロは言っています。

**「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」**

また、17節ではこう言っています。

**「そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいます。」**

つまり、私たちの罪の赦しは、イエスの復活と絶対的な結びつきがあるということです。イエスが復活しなかったら、福音は偽りであり、私たちの信仰はむなしく、私たちはなおも自分の罪の中にとどまっていることになります。イエスのからだの復活の事実を否定する著名な神学者や学者たちがいますが、その

では、イエスの復活の証拠に進みましょう。イエスの復活について、聖書ではどのような証拠が挙げられているのでしょうか。興味深いことに、第一の証拠は、目撃者の証言ではありません。第一の証拠は、人間の証言よりも優先される、「みことば」の証拠です。

「この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。」

「犬どもが私を取り囲み、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。」

「打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。」

「私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。」

「それゆえ、私の心は喜び、私のたましい(英語 NKJVでは栄光)は楽しんでいる。」

「それゆえ、私の心は喜び、私のたましいは楽しんでる。私の身もまた安らかに住まおう。」

「まことに、あなたは、私のたましいをよみに  
捨ておかず…」

イエスのたましいは、よみに下られたことを示しています。

「あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」

イエスのからだは、墓の中にかなりの時間置かれていましたが、腐敗することはありませんでした。なぜなら、イエスは一度も罪を犯したことがなかったからです。罪はからだを腐敗させる傷だからです。そして、最後の節にこう書かれています。

「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」

それはイエスがよみがえられた時に成就されました。イエスは父の臨在へと戻り、そこには喜びが満ちていました。それが一つの例です。

もう一つの例は、詩篇71:20-21です。これは驚くべき詩篇です。作者は不明です。背景を調べてみてください。とにかく作者は神についてこう言っています。

「あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。」

そのことは、詩篇の作者たちの誰にも起こらなかったことです。

「あなたが私の偉大さを増し、ふり向いて私を慰めてくださいますように。」

これはイエスにだけ当てはまります。イエスは葬られ、よみがえり、その偉大さが増しました。イエスはすべての名に勝る御名の持ち主となりました。それは詩篇の作者に起こったのではなく、イエスに起こったことです。彼らのうちにあったメシアの霊が、後に起こることを前もって証したのです。あなたがこの真理を受け入れ始めるとき、それはイエスの復活の現実の最も力強い確証となります。

そして、もう一つ興味深い聖句があります。パウロは1コリントで、福音は3つの事実から成っていると述べています。それは前にも見たところです。イエスは聖書に従って死に、葬られ、聖書に従って三日目によみがえりました。三日目にイエスがよみがえると述べているみことばを調べたことがありますか。それは一箇所だけにしか見られません。文脈をはるかに超える興味深い箇所です。ホセア6:1-2です。

「さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、私たちを打ったが、ま

た、包んでくださるからだ。主は二日の後、私たちを生き返らせ、三日目に私たちを立ち上がらせる。私たちは、御前に生きるのだ。」

これは、三日目の復活の非常に明確な預言です。興味深いのは、単数形でイエスについて言っているのではなく、複数形で私たちについて語られていることです。

これは啓示です。エペソ2章を見てみると、パウロがこの啓示をどのように適用しているかがわかります。このように、預言とは、単に未来に起こる出来事を予告するだけではなく、それらの出来事の真の意味を示す方法で預言します。預言するだけでなく、解釈もします。エペソ2章4節はその完璧な例で、すべての真の信者について書かれています。

「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちを…」

これは素晴らしいことです。神は死んでいた私たちを愛してくださいました。いったい何人の人が死体を愛することができるのでしょうか。ところで、神は何をしてくださいましたか。3つのことです。

「キリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです——キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」

それらはすべて過去形です。ですから、私たちはイエスと一つになることにより、生かされ、よみがえらされただけではなく、御座に着きました。それが私たちの行く場所です。そして、パウロはそれを未来に置いていません。要するに、もしそれを受け入れることができるなら、あなたは今イエスとともに御座にいると言っているのです。しかし、これはホセア6:1-2の成就です。みことばがどれほど素晴らしい解説をしているかを知ってください。

そして、パウロは人間の証言のリストも与えています。無関係ではありませんが、二次的なものです。簡単に見てみましょう。1コリント15:5-8です。まず、4節にこうあります。

「また、葬られたこと、また、聖書の示すとおりに、三日目によみがえられたこと」

5-6節。

「また、ケパ(ペテロ)に現れ、それから十二弟子に現れたことです。その後、キリストは五百

人以上の兄弟たちに同時に現れました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。」

彼らの大多数は今なお生きており、当時彼らはおそらくかなり若かったでしょう。

「その後、キリストはヤコブに現れ、それから使徒たち全部に現れました。そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現れてくださいました。」

これは、イエスの復活を目撃した人々のリストです。ユダヤの律法では、法律で立証するためには、信頼できる2人の人の証言で十分でした。しかし、神はイエスの復活のために2人以上の証言を提示しておられます。

ちなみに、私にとって興味深いことをお話しします。パウロは予定日より早く生まれた者としてイエスを見たと言っています。早産の者として。私はそのことについて長い間思い巡らしてきましたが、パウロはイスラエルがメシアを見る時の最終的な救いについて予示しているのだと信じます。しかし、パウロは2000年前にその成就を見る前に月足らずで生まれたのだと。あなたはそれについて私と議論しても構いません。あなたが救われていることに変わりはありません。

さて、復活の重要性についてお話ししましょう。イエスの復活以上に重要なものはありません。それは宇宙の歴史の決定的事実です。人類だけではなく、宇宙の歴史全体がイエスの復活の事実を中心に回っています。第一に、それはイエスについての神の証明です。ローマの世俗的な法廷とユダヤの宗教的な法廷という2つの法廷がイエスに死刑を言い渡したことを思い出してください。イエスは葬られた時、その罪状のもとにありましたが、よみがえられた時、神はご自分の御子であることを立証したのです。これは、ローマ1:3-4で表現されています。

「御子に関することです。御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」

これは聖霊についてのユダヤ的な言い方で、実際、聖霊はヘブル語では、「聖い御霊」という表現です。翻訳者の中には、パウロがヘブル語で考え、ギリシャ語で書いていることに気づいていない人もいます。

「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方...」

ですから、イエスが墓から出てきた時、神はこう言われました。「私は、それらの不当な決定を覆した。私の息子の潔白を証明した。彼は決して罪を犯しておらず、死刑になる理由もなく、私の聖霊によって、彼をよみがえらせた。」

これは興味深いことです。詳しくは触れませんが、贖いのあらゆる重大局面には、三つの神格すべてが関係しています。イエスの受胎は、御子を生み出すために御霊を通して御父によってなされたことです。ペテロはイエスの奉仕について、「父なる神が聖霊と力でイエスに油注いだ」と言っています。御父は御子に御霊の油を注ぎました。イエスの死については、「永遠の御霊を通してご自身を神にささげた」と言っています。御子は御霊を通して御父のもとへ行ったのです。イエスの復活については、「御霊により父は御子をよみがえらせ」ました。そしてペンテコステでの最後の宣言は、「イエスは御霊の賜物を父から受け、弟子たちに注がれた」です。このように、贖いのすべての主要な段階に、神格の三位一体が完全に関連していることが分かります。敬意をもって言いますが、神格のうち一人として、この栄光ある人類への訪問のために省かれることを望んでおられなかったようです。神は私たちが思っている以上に私たちに関心を持っておられます。それは私にとって大きな意味を持っています。神格全体が贖いのプロセスのすべての主要な段階に完全に関与していたのです。

さて、イエスの復活は私たちの義のための基礎です。イエスが復活されなかったら、私たちは今も罪の中にいることになります。パウロはローマ4:25で言っています。

「主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」

もしイエスがよみがえらなかったなら、私たちは義とされることはなく、私たちはなおも罪の中にいるのです。

そして、パウロはローマ10:9-10で、救いについて言っています。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

そうです。神がイエスを死者の中からよみがえらせたことを信じなければ、あなたは救われません。それが救いには不可欠なのです。残念ながら、肉体の復活を信じていない多くのクリスチャンがいます。そのような人は、教会でどのような立場であったとしても、罪の赦しの平安と喜びを知ることはできません。



「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです...」

興味深いことに、「空中」を表す2つのギリシャ語の単語があります。一つは非常に高い所を表現する単語で、もう一つは地球の表面に近い空中です。ここで使われている単語は低い空中です。ですから、私たちは地上からあまり高くない空中で主に会います。

「次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

そのあとは、もう離れることはありません。私たちは常に主とともにいて、互いにいつも一緒にいるのです。

私の先妻はすでに先立ちました。しかし、いつの日か私たちは永遠に一緒にいるでしょう。ですから、このことをどうか見逃さないでください。これを見逃すことは、あなたの人生の最大の悲劇です。これは重大で真剣なものです。

最後に、このことを言わなければなりません。復活には3つの段階があります。Iコリント15:22です。

「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。しかし、おのおのにその順番があります。」

ここに3つの異なる段階があります。まず初穂であるキリスト、次にキリストの再臨のときキリストに属している者、そして最後に、残ったすべての死んだ者たちの最終的な復活です。イエスは誰のために戻って来られるのですか。キリストにある者たちにです。イエスは盗人ではないので、ご自分に属さない物や人を連れて行くことはありません。あなたは本当にキリストのものですか。それは重要な質問です。キリストが戻って来られるのは、その人たちのためです。

キリストは初穂と呼ばれています。興奮すべき聖書の節があります。レビ記23章です。一度きりの短く簡単な儀式です。これはモーセの律法のもとにある儀式です。10-11節。

「イスラエル人に告げて言え。わたしがあなたがたに与えようとしている地に、あなたがたが入り、収穫を刈り入れるときは、収穫の初穂の束を祭司のところに持って来る。祭司は、あな

たがたが受け入れられるために、その束を主に向かって揺り動かす。祭司は安息日の翌日、それを揺り動かさなければならない。」

安息日は何曜日ですか。土曜日です。安息日の翌日は何曜日ですか。日曜日です。イエスは何曜日によみがえりましたか。日曜日です。イエスは「束」であり、私たちがイエスのゆえに受け入れられるために揺り動かされたのです。

イエスはたった一本の穂ではなく、束でした。マタイ27章を読むと、イエスが死んだとき、地震が起こり、墓が開いて眠っていた聖徒たちの多くが都の中へ入ってきました。私は、彼らは墓の中へ戻って行ったのではなく、イエスとともに上って行ったと信じます。彼らは後に続く多くの群衆がいると言って、主の前に揺り動かされる束となりました。私たちは束であり、初穂です。

あなたが本当にしるしに向かって進んでいるか、人生で正しい優先順位を持っているかどうか、チャンレンジしたいと私の霊が促しています。1977年、私はニュージーランドの北島で持たれたとりなしの集会で、どの国にも一人の強い存在がある事実について教えていました。人々は私に聞きました。「ニュージーランドに働く強い存在とは何ですか。」私は、「それは私が教えるべきことではなく、ニュージーランドのクリスチャンが見出すべきものです」と答えました。しかしその時、私は主が、「その強い男を教えよう」と言っていると感じました。ですから、私は人々にそれを伝えたのですが、その集会の後ろの方の席に私の親しい友人が座っていました。彼はあとで、私がその強い人のことを言っていたとき、神は同じことを彼にも語ったと言いました。私が言ったその「強い人」に期待外れと思うかもしれませんが、ニュージーランドの強い存在は「無関心」です。ニュージーランド人の典型的な表現は、「何とかなるさ」であるとニュージーランド人から聞きました。言い換えれば、放っておいても大丈夫だということです。それはニュージーランドでの最大の問題であり、あなたがたもその問題を持っているかもしれません。なぜなら、イエスは無関心の人のために戻って来られるのではなく、イエスを熱心に待ち望む人々のために戻って来るのです

今、あなたに機会を与えたいと思います。もしあなたが、イエスを待ち望む生き方をしていないと気づいたなら、今こそ変わるべき時です。悔い改めについて私が言ったことを覚えていますか。決断に続いてなされる行動です。もし自分には悔い改めが必要だと感じていたら、今がその時です。私が言ったことを思い出してください。悔い改めたいときに悔い改めることができるのではなく、聖霊があなたを促すときにのみ、悔い改めることができるのです。

自分は正しい生き方をしていないと聖霊が語っていると感じていて、イエスの再臨を待ち望む態度を持っていないとわかって、そのような生き方を変えられたいと願うなら、私はあなたに機会を与えたいのです。私と一緒に祈ってください。そのた



メッセージ 

原稿: MV-4168-100-JPN

最終更新日: 12 Oct 2026

ウェブサイト: [Derekprince.com/ja/resources](http://Derekprince.com/ja/resources)



“「人生の問題は心から湧き出ます。神の律法があなたの心にあるとき、あなたは神の道を歩みます。」”

デレク・プリンス



[Derekprince.com/ja/resources](http://Derekprince.com/ja/resources)